

「光るまなざし 支え合う子」をめざして  
ーたのしくて、力がつく学び合いの授業ー

喜多方市立第一小学校 教諭 滝口 裕

## 1 研究の趣旨

本校では、長きにわたり、めざす子どもの姿「光るまなざし 支え合う子」を実現するため、「学び合い」の授業実践を通して研究に取り組んできた。

昨年度までの研究の結果、子どもたちは、自分なりに考えをもち、友達との話し合いに対して、喜びを見出すことができるようになった。とりわけ情意面でよい結果が得られ、児童が主体的に学習に取り組む姿勢が身に付いてきた。特に学び合い活動が活発だった学級では、児童同士の関係性も改善し、生徒指導的な面でも効果を得られた。しかし、改善傾向が見られるものの、学年相当の学力が十分身に付いていない学年が多いことが、各種学力調査の結果から明らかとなった。そこで、本校としての「学び合いの授業」観を再確認し、共通理解の下、研究に取り組むことにした。さらに、教師自身はもちろん学習の主体となる子どもが「学び合い」観を理解し、共有して授業をつくることを重視し、実践を進めていくこととした。本校が目指す学び合いの姿は、以下のようなものである。

- ① 子どもの主体性に基づいて探究的に学習活動ができるよう、「文脈性のある授業」展開となっていること。
- ② 教師は、学ばせたい知識・技能を児童が必要とするように、子どもの追究を導く役割を果たすこと。さらに、授業を展開させる上でのファシリテーターを務めること。
- ③ 子どもは、発言するだけでなく聞き手としての役割を果たすことができること。

## 2 研究の概要

### (1) 一小ベース「日常の学びを支える基盤作り」

- 学び合いの目標の共有化を図るとともに、「学び合い方」を学ぶ機会を設定する。
- 「ある子ども(A児)」を設定することから単元の学習活動を構想し、具体的な手立てを講じる。

### (2) 視点1「子どもの問いから始まる文脈性のある授業作り」

- 子どもの追究の筋道を予想することで練られた授業展開を積み重ねる。
- 子どもにとっての「切実な課題」と、「新たな問い／真の問い」を設定する。

### (3) 視点2「学び合いの効果を『力』にかえる授業作り」

- 「よい聞き手」を育む指導を充実させる。
- 自己評価としての「振り返り」と学びの実感をもたせる工夫をする。

## 3 成果と今後の課題

### (1) 研究の成果

- 子どもが他の学級を参観する「子どもの互見授業」を実施することで、友達とどのように話し、どのように聞けば良いかを具体的な姿として見ることができ、具体的な姿を自分自身の取り組み方に生かそうとする姿も見られた。この活動が学び合いの活発化を図ることに結び付いた。
- A児の実態から単元計画を立てる中で、子ども達に明確に問いをもたせることができた。また、「新たな問い／真の問い」の設定が、学び合いをさらに促す効果があることが分かった。

### (2) 今後の課題

- 聴き方が主体的でないため、教師の“進行”によってようやく友達の考えの存在を意識できる場面が見られた。友達との対話をもつ目的を明確に示したり、学び合うことでできるようになったことを見取って価値付けたりするなど、教師の役割を見直したい。